

[論文]

## ミノア文明における空間と時間の概念

矢 後 長 純

### はじめに

Immanuel Kantは18世紀後葉、人間は表象によって行動をおこすとし、その表象は空間と時間の概念によって支えられ、かつ内的原理として構想力(Einbildungskraft)を持つと指摘した<sup>1), 2)</sup>。Kantのいう人間とは現生人類(Homo sapiens sapiens)であり、指摘したことは5億年前の脊椎動物に始まり現生人類にまで進化しつつ継承されてきた知能システムの現況である。Stephen Mithen<sup>3)</sup>は1996年、人類(Homo sapiens)の脳は10万年前に認知流動性(cognitive fluidity)を獲得し、1万年前に一般化型知能(generalized intelligence)を発揮して現生人類になったと主張した。表象、空間・時間概念、構想力は、いずれも認知流動性・一般化型知能の表現型である。

すなわち、現代人の祖先は、一般化型知能により農業を開発し新石器時代を迎えたということでもある。現生人類では第2種表象コンパートメントにおいて発生する表象により文化・文明を表出させるという筆者の考え<sup>4)</sup>

も、Kantの表象論やMithenの知能システム論を支えとしていると理解される。

その後、現生人類は青銅器時代へ進み、新しい繁栄を獲得した。ここで現代進化論は、Stephen Jay Gould<sup>5)</sup>の断続平衡説を前提に、青銅器時代への進入に際し知能システムがある種の閾値を乗り越えたと推察する。さらにその後、鉄器時代への進入に際しても、もちろん知能システムは新たな閾値を乗り越えた。

本稿の主たる関心は、青銅器時代への進入後、表象を浮かべる空間と時間概念がいかなるものであったかということにある。対象とする空間と時間の概念<sup>6), 7)</sup>は、Newtonの三次元空間・絶対時間の概念およびLeibnizの事物・事象間の関係性と継起を重視する概念である。Gustav Fechner<sup>8)</sup>のNachtsansichtとTagesansichtの問題でもある。

知能システムは個人レベルでは、成長、成熟、老化、衰退という経路を通り、時に部分的に崩壊する場合(例えば、認知症高齢者の徘徊)すらあることは周知の通りである。しかし、文化・文明を考える場合には、少なくとも民族レベルで考えねばならない。Kantの表象論を基礎原理とし、Emil Durkheim

の集合表象 (représentation collective)<sup>9)</sup>を支える空間と時間の概念を考察することになる。

本稿では、史上、最初のヨーロッパ文明としての青銅器文明を謳歌し、かつ鉄器時代を目前に劇的に滅亡したクレタ島ミノア文明の空間と時間概念に焦点をあてる。

なお、空間と時間について Kant は、『純粋理性批判』<sup>1)</sup>の中で「空間は、外感によって表象せられる一切の現象の形式にほかならない」と定義し、概念ではないとした。時間も同様である。しかし、Kant 自身がしばしば空間概念、時間概念という語を用いている。この矛盾は『純粋理性批判』の訳者篠田英雄氏<sup>1)</sup>も指摘しているが、本稿でも時間、空間に対して形式ではなく概念という用語をあてる。

## 第1章 表象から見たミノア文明の特徴

気候温暖、風光明媚かつ世界有数の草花の宝庫クレタ島<sup>10)</sup>に、BC 7000年～BC 6000年<sup>11)</sup>、言語の異なる人々が石器を携えて近東から移住し新石器時代文化を展開した<sup>12)</sup>、<sup>13)</sup>。クレタ島の温和な自然環境は、彼らの精神の成長に大きな影響を及ぼしたであろう。彼らは4000年～3000年間の小規模農村共同体を経てBC 2800年～BC 2600年ごろ青銅器時代に達した。この間、新石器時代の中後期に相当する130世代ほどの間に、移住者たちは相互のコミュニケーションを円滑に進めるための言語と文字を創発した。今もって解明されていないとはいえ、それらの展開の過程で彼らは独自の空間と時間概念を磨き、ミノア文

明の基盤を整えたと考えられる。

こうしてBC 2000年ごろに指導者や官僚組織を持つ古代社会としての体制を整え、いわゆる旧宮殿時代を迎えた。そしてヨーロッパ最初の文明を築き、その繁栄を享受し始めた<sup>13)</sup>、<sup>14)</sup>。旧宮殿はBC 1730年ごろに地震の被害を受けたが、ただちに修復、再建された<sup>15)</sup>。大きかったとはいえこの時の地震では、文化の断絶は生じなかったというのがクレタ島考古学界の通説である。新宮殿は、より宏大で装飾性も高まった。Bernal 教授は、新宮殿をとりまく知識で旧宮殿時代をおしはかることは可能であると述べた<sup>15)</sup>。

今日、Knossos の遺跡と部分的に復元されている新宮殿を見れば、ミノア文明の人々の Newton 三次元空間への鋭敏な信頼がみて取れる。また同時に、美しいフレスコ画、bull-jumping などから、彼らが Leibniz 空間における事物の並存に温かい安心感を得ていたことも分る。

しかし、新宮殿を含めクレタ島の全市町村はBC 1628年<sup>15)</sup>、テラ島の大爆発による大地震により壊滅的な被害を受け、ミノア文明は滅亡した。ミノア文明の船の往来は途絶えた。ミノア人は彼ら自身の名称はおろか文書記録もほとんど残さず、Arthur Evans (1851～1941) が1900年に発掘を開始するまで3500年余の間、消息を絶ってしまった。発掘開始より1世紀以上を経て再び脚光を浴びつつあるミノア文明は、現代のわれわれに二つの大きな課題を投げかけている。第一の課題は、ミノア文明には城壁や城塞、多量の武器や軍事施設の存在を示すものがないことの意味をめぐり、20世紀後半以来、激しさを増したクレタ島考古学界の論議である。発

掘当初から世界的に広まった牧歌的なミノア文明というイメージに対し、ミノア人は真の平和愛好者だったのかどうかにつき、激論がかわされている<sup>16)</sup>、<sup>17)</sup>。第二の課題は、ミノア文明には人身供犠に加えてカニバリズムがあったのではないかという強い疑いが持たれ始めたことである<sup>18)</sup>、<sup>19)</sup>。

これらの議論を空間と時間概念に置き換えると、ミノア文明の集合表象を支えた概念には、事物並存と事象継起の概念すなわちLeipnizの概念が濃厚であったか、希薄であったかということになる。

第一の課題については、Knossos Palaceの発掘（1900～1905）にあたったEvansが、ミノア文明には部族間の争乱や周辺国家との戦争もなく平和が維持されていたとし、これをPax Minoicaと称した<sup>12)</sup>、<sup>14)</sup>のが発端となった。彼の多大な功績を憚ってか、Evans逝去後に反論が噴出し始めたのである。この点についてBernal教授は1991年、「BC2000年からBC1730年の旧宮殿時代のクレタ島ではクレタ島宮殿「諸国家」間が比較的調和がとれた関係にあり、外からの脅威もなかった、そのため国防と暴力への関心は比較的小さかった」<sup>15)</sup>と述べ、およそ270年間の平和については限定的に賛同の立場を示唆した。これに対してウイーン大学の研究チームは1996年、その期間こそ内戦がもつとも激しかったと推定した<sup>17)</sup>。

クレタ島も含めて当時のエーゲ海周辺の古代国家は互いに宗教を異にしていたから、エーゲ海世界に宗教的統一があったはずはない。また、わが国の江戸幕府が取った鎖国政策とは異なり、ミノア文明では活発な交易を続けていたから、その維持の手段や環境に強

い関心が寄せられるのである。1946年に遡るがBertrand Russel<sup>20)</sup>は、疑いもなく海という力が彼らを防衛したと述べているが、海洋民族であったミノア人が局地的にせよ外国を侵略しなかったのはなぜか、という疑問も残る。彼らは交易を継続する必要から、Leipnizの関係性重視の空間、時間概念によるコミュニケーションすなわち平和を重視していた可能性が高い。

第二の課題は、Sakellarakis教授夫妻(John and Efi)が発見したAnemospilia Shrineにおける人身供犠である<sup>19)</sup>。ほかにカニバリズムの疑い例が出土したため、華々しいPax Minoicaの議論とは裏腹にミノア文明の負の局面を示唆する深刻な問題となって浮上した。

永続的な国際間の平和と繁栄がミノア文明にあったとして、それを人々の心性から考える時、まず思い浮かぶのは、現生人類(Homo sapiens sapiens)における人類愛概念<sup>22)</sup>の発生・成長・成熟、すなわち庶民レベルにおける心性の進化論である。現代では平和と繁栄の維持には、国連という人類愛による巨大なシステムが存在する。また、二度の世界大戦を経験した西欧諸国はEUを結成し、60年以上の平和と繁栄を維持してきた。これも人類愛のシステム化の成果である。

もしミノア人が萌芽的にせよ人類愛を持っていたとすれば、それを平和と繁栄の創発、維持のための契機にはし得たであろう。彼らは生活様式からLeibnizの空間と時間の概念を抱いていたことは明らかであるから、ある程度の力を持つ人類愛を生み出すことができたであろう。しかし、人身供犠との両立をどのようににはかったのであろうか。

## 第2章 Knossos Palace・Vathypetro Megaron・Anemospilia Shrine

### 1. Knossos Palace<sup>11), 13)</sup>

クレタ島最大規模の宮殿 Knossos Palace は、島全域の統率をしていた。社会は動物供犠 (sacrificial ritual) によって統一され、僧侶と王を兼ねる priest-king、官僚、商人、労働者を配していた。労働力は庶民で充分だったらしく、周辺諸地域から奴隷を拉致した形跡はない。宮殿の貯蔵庫は武器ではなく、輸出用のオリーブ油や葡萄酒の甕の数々で満たされていた。史上初の最大規模の貿易国家として、Leibniz の並存の概念がもっとも広く行き渡っていたことを示唆する光景である。

ミノア人は原材料の採鉱、採掘、精錬などには労力をかけず、エーゲ海諸地域・島嶼に委ねていた。Knossos Palace 周辺の人口はデータがないが、宮殿の規模から多くて20万人程度かと思われる。平均寿命は古典古代ギリシャ程度<sup>23)</sup> とすれば17歳前後と推察されるから、労働力の配分からみて全産業型社会にはなり得なかった。交易が盛んだったことは相互の異なる言語が円滑に理解されていたことを示す。

宮殿周囲には舗装された直線道路が延び、澁刺とした社会活動が示唆される。庶民は思い思いの装飾デザインの家屋に住んでいた。2階建ての家屋がしばしば発掘されている。家々の窓には可愛らしい花が飾られていたようである。温かく開放的な社会が見える。ギリシャ考古学者の Logiadou-Platonos<sup>13)</sup> は、次のようにのべている。

“... continuous peace — the famous PAX MINOICA — prevailed throughout the island, which facilitated the great cultural development, the charming, refined way of life, and the Cretan thalassocracy.”

しかし繁栄を享受していたミノア文明は、BC1628年<sup>15)</sup>、突如、現在のクレタ島の首都 Heracriion の北96キロの小さなテラ島の大爆発により壊滅的な被害を受け、そのまま衰退へと向かった。過去にも数回の大地震に見舞われた経験があったようだが、この時の被害はまことに甚大で、彼らは二度と立ち上がることは出来なかった。

大災害を受けたクレタ島には、ギリシャ本土のミキーネ人が寒冷と旱魃<sup>23)</sup> から逃れて移住してきた。BC1450年には、ミキーネの軍隊が Knossos Palace を占領した。災害を生き残った僅かなミノア人には、廃墟とはいえ宮殿や町を防衛する力はなかった。占領軍にも瓦礫を整理して宮殿を新築するほどの力はなかった<sup>25)</sup>。

こうしてクレタ島には古代ギリシャ語を話す人々が増えた。そしてテラ島の大爆発からおよそ400年後のトロイ戦争までには、移住してきたミキーネ人はミノア文明を部分的に継承（例えば農業歴の作成方法）しながらも独自の生活様式を築き、生産性と権力を奪取しクレタ島を支配した。考古学的に目立つのは墳墓の様式が異なること、『イリアス』第2歌の軍船表<sup>26)</sup> に示される軍拡路線を走ったことであった。因みに、占領下のミノア人の生活については資料がない。

クレタ島で吟遊詩人たちから世界最初の叙事詩『イリアス』<sup>25)</sup>、『オデッセイアス』<sup>26)</sup> の

朗誦を聴いていたのはミキエネ人であった。彼らは10数世代ほど前の祖先の勇猛な戦闘ぶりに昂ぶることもあっただろうが、もっとも愛好したのは家族愛溢れる物語で、敵味方、将軍・兵士を問わず戦死した人たちや家族へ哀惜の涙を流していた。Leipniz空間の涙である。Thomas Cahill<sup>27)</sup>は、物語により家族愛を確立したのはHomerosの聴衆だったと述べているが、好戦的と称されたミキエネ人の精神にもクレタ島の温和な自然がいつしか影響を及ぼしていたのであろう。ペロポネソス戦争(BC431~BC404)には、クレタ島は参戦しなかった。僅かに生き残っていたであろうミノア人から見れば、すでに遠い過去となったミノア文明の豊かなLeipniz空間への憧憬がミキエネ人にもようやく理解されたということである。

その頃、壊滅したミノア文明の家々は放棄されたまま砂塵に埋もれつつあった<sup>24)</sup>。ギリシャ本土では気候の寒冷化がますます進み、農業生産は落ち込み、トロイ戦争で主役を担ったミキエネは衰亡に向かっていた。Schliemannが発掘したミキエネの城塞には今日、世界中から観光客が殺到するが、地域一帯は荒涼たる一寒村に過ぎない。

壊滅したミノア人の家々はその後3500年以上も放棄された。20世紀に発掘作業が開始されるまで、ヨーロッパ最初の文明は盗掘も受けず静かに眠っていた。Evansがミノア人という仮名を与えた人々は今日、一人も残っていない。彼らのDNAはエーゲ海沿岸地域に拡散されたままである<sup>29)</sup>。しかし新石器時代にクレタ島に移住してきた人々とその子孫が3000年以上にわたる営々たる努力によりミノア文明を築いたことは、最近、J.

R. Hughey博士ら<sup>29)</sup>のミトコンドリアDNAの解析により確認された(autochthonous development)。この成果は史上最大級の地震の被害を受けた人々へのせめての鎮魂と云いたい、ミノア人の死生観とくに靈魂に関する観念が不明である<sup>30)</sup>ため、札を失するやも知れず、筆者の感傷の吐露としておく。

## 2. Vathypetro Megaron<sup>31), 32)</sup>

Heracriionから南へ約20キロ、蛇行する山道沿いのこの遺跡もテラ島の大爆発による大地震によって崩壊した巨大な建造物の跡である。この遺跡は、意味も不明な現在の地名をそのままとって名付けられた。現況の遺跡周囲は葡萄畑だが、今なお、その下に相当な範囲にわたって全壊した建造物が広がっている。遺跡の機能としては周辺の農産物であるオリーブや葡萄を集荷し、オリーブ油、葡萄酒を生産する製造所であり、かつ、それらの貯蔵およびKnossos Palaceへの出荷の拠点だったと推察されている<sup>32)</sup>。遺跡からは足踏み式の絞り器が出土している。遺跡の規模が大きいことから、周辺の農家が広く組織されていたと考えられ、経済活動も相当に活発だったと思われる。

遺跡は、1948年から数年をかけて当時のHeracriion博物館長、後にアテネ大学考古学教授のSpiridon Marinatos博士が指揮をとって発掘し、埋め戻したものである。

教授には発掘開始の当初からここを博物館にする意図があったといわれ、遺跡の一隅に出土品の収蔵庫が置かれた。教授は意図半ば、テラ島の発掘作業中に奇禍に見舞われ、Vathypetro遺跡のテーマパーク化も中断されたままである。その中であって、教授が宗

教的施設 *Tripartite Shrine* (訳語は三社神社) の遺構として遺した小さな三本の柱の跡は、後に季節ごとの日の出観測のための重要な柱であったことが判明し、ミノア文明に精確な農業歴があったことが示された<sup>32)</sup>。ミノア人は、太陽の運動について、Newton の空間・時間概念における精確な表象を持っていたのである。

### 3. Anemospilia Shrine<sup>19)</sup>

1979年、Heracrion から15キロほど南の町 Archanes の郊外、北方遥かにクレタ海を望む Juktas 山の中腹の台地に比較的小さな神殿の廃墟が発見された<sup>20)</sup>。発掘のリーダーはアテネ大学考古学教室の Sakellarakis 教授夫妻で、夫妻は1983年、アテネ学士院賞を受賞した。

発掘された遺構1階のディメンジョンは、縦11m、横13.6m、ほぼ正方形の石造りである。東側の正面玄関とおぼしきところに入ると、幅4mほどの廊下があり、ここから左側に3つの部屋(各15平米)がある。廊下右側にも石造りの壁の一部が発掘されたことから、廊下を挟んで左右に対称的に部屋があったと推定されている。最初の部屋は祭具らしい大小の壺の置き場でいわば式祭準備室、2番目の部屋は正面の壁(南側)に木彫のミノア神が祀られた式祭室、3番目の部屋は世界に衝撃を与えた供犠準備室であった。

供犠準備室にはテーブルがあり、その上に頭部を南側に、体の右側を下に横臥した青年の遺体があった。テーブル脇の床には、中年の男女各一人の遺体と大きな刀が落ちていた。そして部屋から廊下への出口には、中年男性が砕け散った聖杯とともに倒れていた。

今まさに、部屋を出ようとしたところだった。これらの人たちは、いずれも落下してきた石材に打たれて即死したのである。

この異常な光景に遭遇した教授夫妻は、考古学者や解剖学者、警察、司法などあらゆる分野の専門家を集め、1年をかけて状況を検討した。その結果、ここで行なわれたことは、テラ島の大爆発直前にあったであろう無数の予震を動物供犠では抑えられなかったための究極の人身供犠という重大な結論だった。

テーブル上の青年の左頸動脈を切り、噴出した動脈血を聖杯に受け、隣室の式祭室に持ち出そうとした男性はその瞬間に巨大地震に見舞われ、神殿は瞬時に崩壊、居合わせた関係者全員が即死、そのまま3600年余を経たことになる。大地震が来たのは、青年が意識を失ってから数秒後のことであろう。

この地震もテラ島の大爆発によるものと断定できる。同時刻に Knossos Palace も Vathypetro Megaron も、そしてクレタ島のすべての家々も倒壊し、多くの人々が災禍に命を落とした。文字が普及していない社会であったから、当然、語り部も居たと思われるが、その人たちの生命も貴重な知識もすべて失われてしまった。Marinatos 教授<sup>32)</sup> は1939年、ミノア文明の市町村がテラ島に起因した大地震により一斉に崩壊したとする見解を述べたが、その後の数々の発掘作業で支持されつつある。

青年はクレタ島全体の安寧を願って犠牲になったのである。彼および司祭たちの表象は誤った思想を反映していたが、心は人々の安寧のためという共存を希求したもので、行為は崇高ともいえる。身命を賭した青年を想う

われわれには深い無念の思いがひろがる。

### 第3章 エーゲ海における人類愛発展 の現象論

#### 1. 人類愛の萌芽とその成長

システム (system)<sup>34)</sup> は、内部に相互作用をする部分 (part)、要素 (element) またはコンパートメント (compartment) を持つ一つの全体 (totality) である。現生人類は、生、死、健康などの概念とともに、人類愛という巨大な概念を抱いている。これらの概念は、いずれもシステムである。

人類が Homo sapiens へ進化して間もなくの約20万年前～13万年前、人類を含めアフリカの脊椎動物は深刻な寒冷に遭遇し、絶滅の危機にあった。アリゾナ州立大学の C. W. Marean 教授は2010年<sup>35)</sup>、人類は僅か400人程度の絶滅危惧種になってアフリカ最南端の海岸に押し詰められ、貝類や海藻を採集して生き延びたと発表した。この時に現生人類第一の義務規定“溺れるこどもを救助せよ”が、遺伝子システムに刷り込まれたのであろう。当時、人類はまだ十分な言語使用が出来なかったので、“火に近づくな”と同様、“溺れるこどもを救助せよ”の遺伝の主たる担い手は、大脳辺縁系と進化しつつあった大脳皮質に非言語システムとして構築されたものと思われる<sup>37)</sup>。このシステムこそ、現生人類に特徴的な、集団としての脳機能の表出、すなわち人類愛の萌芽である。

人類愛は母子愛、家族愛などを基盤とし、かつ、それらをモジュールとしてではなく、互いに包摂されるサブシステムとして旧石器時代に発生した萌芽が、新石器時代に成長を

開始したものである。爾来、人類愛は人口増とともに徐々に内容が充実し19世紀には看護概念、20世紀第4四半期には地球環境概念と社会福祉・介護福祉概念を包摂するサブシステムとして包含するに至った。人類愛システムは、今日では多くのサブシステムを包摂する巨大なセミラティス構造をなしている。

#### 2. 人類愛カオスの出現

二度にわたるペルシャ戦役では国家の滅亡寸前にまで追い込まれたギリシャ人には、いっしょに人類愛が成長していたものと思われる。そのシステムは、社会現象としては突然のカオスの形で姿を現した。

BC430年、アテネ市民はペロポネソス戦争に加え、人から人への強い感染性を持ち、しかも高死亡率のツキジデス症候群<sup>38)</sup>の蔓延という強大なストレスに曝された。名宰相 Pericles (c.BC495～BC429) も二人の息子も感染し、死亡した<sup>39)</sup>。パルテノン神殿や一般道には遺体が山をなした。市外からこれを遠望したスパルタ陸軍は突入をあきらめ、撤退した。市民はスパルタに無条件降伏 (BC404) をした後、強権政府 (三十人政権) を組織し、これに富裕階級1500人の処刑と財産の略奪を許した。

しかし直ちにその政府を崩壊させたが、強権政府の閣僚のほとんどを無罪とする温情も示した。その一方で彼らは、現生人類史最大のスキャンダルである Socrates (BC469～BC399) の処刑を実行した。そしてその悪夢さめやらぬうちに Platon (c.BC427～BC347) は、人類最初の大学アカデミアを創設した (c.BC387)。

2400年前のアテネ市民の精神を襲った一

連の激震は、彼らが限りない精神の彷徨を経験したことを示している。その彷徨は、人類愛の存在をカオスとしてではあったが、明瞭に表出させたものであった<sup>21)</sup>。

筆者らの複合クワッソン理論 (Compound quassonian theory)<sup>39)</sup> によれば、現実世界のあらゆる事象は第2クワッソン (quassone) のD状態にあり、その実現には陰に第1クワッソンの準平衡状態が存在する。すなわちアテネ市民の人類愛はカオスとして姿を現したにせよ、萌芽的な前駆状態が第2クワッソンのC状態として存在したはずであり、それは当時の地中海世界の前史に求められるはずである。

### 3. ミノア文明における人類愛の萌芽

アテネ市民がカオスとしての人類愛を経験した頃より遙か以前、クレタ島ではKnossosを中心にミノア人が豊かな生活を享受していた。ギリシャ本土では環境変動により徐々に寒冷と乾燥の影響を受け始めていたこと、北部ギリシャではロドニー山脈のドーリア人による周期的な穀物の略奪を受けていたこと以外には、エーゲ海周辺地域では大きな戦乱もなく平穏であった。クレタ島の平和と繁栄が、エーゲ海周辺諸地域の異民族との共存の上に成り立っていたことが何よりも印象的である。そして平和的な共存そのものがLeibnizの概念であり、人類愛の存在と浸透の証拠である。

ミノア文明における庶民の生活に関する僅かな情報のうち、人類愛の視点からの特徴的なものを数えると以下のようである。

①ミノア人は、5つぐらいの異なる人種からなっていた。彼らの間にはコミュニケー

ションが成立し、クレタ島独自の言語と文字を創発した。

- ②周辺諸国家たとえばエジプトなどとも戦争をせず、友好関係を保っていた。
- ③武器の製造、貯蔵、輸出、使用をはじめ軍事のにおいがなく、軍隊もなかった。
- ④クノッソス宮殿に城壁がなかった。
- ⑤周辺のエーゲ海沿岸地域に対してミノア文明が征服をしなかった。
- ⑥力を用いず平和と繁栄の維持を実現した。
- ⑦異文化・異言語地域と盛んな交易をした。
- ⑧ミノア人による海賊行為もなかった。
- ⑨周辺民族によるクレタ島に対する侵略や海賊行為もなかった。
- ⑩クノッソス宮殿は開放的であり、威圧的ではない。
- ⑪お祭りが好きで、お祭りでは牛の背で回転をする競技があったが、その際、スペインの闘牛のように牛を犠牲にしなかった。
- ⑫Knossos Palaceには現生人類最初の劇場があった。
- ⑬宮殿内部の壁画は、人物、動物、草花など、極めて優美であり、軍事の臭いが無い。
- ⑭上下水道のインフラが整備され、当時の政府は民生に力を注いでいた。
- ⑮宗教は大地信仰で農業神として女神を崇拝していた。温和な庶民生活をうかがわせる。
- ⑯男女平等社会だったらしい。
- ⑰奴隷を使役しなかった。
- ⑱Anemosphilia Shrineにおける供犠の犠牲者および司祭者たちの脳は、人類愛によって住民の安全を願うLeibnizの空間と時間の概念に満たされていたのであろう。



上記の特徴はいずれも他者との空間と時間の概念の共有が必須条件である。このように考えると軍事力によらない平和と繁栄の維持 Pax Minoica が途切れ、途切れの短期間であっても実現されていたならば、萌芽的な人類愛によるものと考えることが出来る。

## 第4章 ミノア文明における空間と時間の概念

### 1. 現生人類における空間と時間概念の進化

夏の夕方、キッチンのガラス窓の外側に張り付いた羽化したばかりの蛾をヤモリが狙うときも、アフリカの草原でライオンがガゼルを追うときも、基本的にはまったく同じ体制をとる。静かに接近し、襲いかかる距離を測り、突如、飛びかかるなど、ヤモリもライオンも明らかに距離間、スピード感などにおいて Newton の三次元空間と絶対時間および速度、加速度の概念、それらに基づく表象を持っていることが分る。

また、親ライオンが数頭の子ライオンを遊ばせる様子がしばしばテレビに映し出される。親子睦まじく戯れている様子からは、彼らがひたすら Leibniz の共存の秩序 (order of co-existence)<sup>6), 7)</sup> に浸っているのがよく分かる。

こうした観察から脊椎動物では Newton の三次元空間と絶対時間の概念および Leibniz の秩序としての空間および時間 (order of succession) の概念を種ごとに遺伝として持ち合わせていて、時と場合により使い分けていることが分かる。ただし、現生人類を除けば動物たちが用いている表象コンパートメントは、おそらく第1種表象コンパートメント

で、機能も現生人類のものとは較べることが出来ないほど小さなものであろう。

現生人類の空間・時間概念には、Newton のもの、Leibniz のもの、加えて Leibniz のものを宇宙全体に存在する実体に拡大した Kant の並存調和<sup>42)</sup> がある。Einstein の空間・時間概念は現代電子機器には欠かせないが、おそらく生物としての現生人類の脳には宿っていない。

アリゾナ州立大学の理論天文学者 Paul Davies 教授は、Newton の空間が三次元である理由は分らない、また流れる時間という感じを物理学では取り扱うことができないと云ったことがある<sup>40)</sup>。進化論の立場に立てば、三次元空間はおそらく、地上生活をする脊椎動物の環境への適応にもっとも便利な空間認識であろう。また Leibniz の時間の概念に移れば、流れる時間を感じることも可能である。Leibniz は人間の社会性に通じるものを語っていたから、個性を尊重し、個人の軌跡、他者との出会い、それによる個人の軌跡の変更を承認し、コミュニケーションによる個人対個人のまとまりの形成、集団と集団のまとまりの形成などを視野に入れることができる。

筆者は先行論文<sup>4)</sup> において、現生人類を含めすべての動物には無表象コンパートメントがあり、表象なしでも行動をおこすことはできるが、現生人類の最大特徴としての文化・文明の構築という壮大な行動には、第1種および第2種表象コンパートメントを起動させねばならないと述べた。とくに平和と繁栄といった総合的な社会的事象を発生させ、維持・継続させるには、第1種はもちろん、第2種表象コンパートメントもフルに働かせる

必要があるだろう。

天体としての月を観測する時、われわれはNewtonの三次元空間と絶対時間の概念を用いている。月をお月様と呼ぶとき、われわれはLeibnizの概念を用いている。天空のお月様は地上のわれわれとともに存在している。

ところがKantは、Leibnizの共存の概念にはすでに空間が含まれ、事象継起の概念にはすでに時間が含まれていると批判した上で、Leibnizの空間と時間の概念を融合させた。Kant独自の包摂であり、システム論的にいえば重層する相互作用とした。われわれの行動も表象もともに、場所と時間との融合を求める。これをKantは“一般的に確立された調和”という難しい用語に置き換えた<sup>41)</sup>。19世紀の言葉でいえばWalrasの一般均衡理論<sup>6)</sup>であり、現代の言葉で云えば“複雑系における自己組織化”<sup>43)</sup>である。

## 2. ミノア文明における時間と空間の概念

Knossos Palace、Anemospilia Shrine、Vathypetro Megaronなどの建造技術、都市計画や農業歴作成のための天文観測技術から見て、ミノア文明の技術水準は相当程度に高い。たとえばKnossos Palaceの3階建て構想をどのように実現したのかを考えるだけでも、それらの背景にあった統治機構や農村管理組織、建築業界の組織と管理など、いずれも巨大かつ精緻なものであった。これらの科学技術を誘導する表象が描かれるのはNewtonの三次元空間と絶対時間の概念である。

さらにそれらの概念を交易に収束して行く作業には、当然、オリーブ油や葡萄酒などの輸出先についての表象、加えて海上輸送のた

めに有利な風向きなどへの表象が伴っていたはずである。このことはミノア人がLeibnizの概念により交易相手への表象をしっかりと抱いていたことを意味する。

そしてKantの“可想界における確立された一般的調和の理論”<sup>42)</sup>、すなわち複雑系の自己組織化<sup>43)</sup>により多民族間の平和と繁栄を実現することが出来たのは、ミノア人の努力もさることながら、関連諸民族が異なる言語を用いながらも互いに充分なコミュニケーションをとっていたことによる。エーゲ海には並存を重視するLeibnizの概念が広く浸透していたといえる。

ミノア文明における平和と繁栄が、仮に途切れ途切れ、短期間であったとしても、それは人類愛をKantが云った共通な原因として一般的に確立された調和をエーゲ海に繰り広げた成果である。ミノア人は、人類愛を媒介として第2種表象システムを駆動し、異言語の多民族間の調和を図った。それは現生人類青銅期時代の豊かな構想力の存在を示す輝かしい業績であった。

しかし、ミノア文明では社会統率の中心に供犠による宗教儀式を置いたこと、地震多発地帯のクレタ島でLeibnizの並存の概念を宗教にまで取り入れたことは、無念な結果をもたらした。Anemospilia Shrineの人身供犠に立ち会った人たちが生き延びたならば供犠の無意味さに気づき、パラダイム・シフトを起こしたであろう。それによりミノア人も真の表象概念に目覚めたかも知れない。あの青年が意識を失ってから、数秒の後におこった神殿の崩壊は、あまりにもむごいことであった。

## 結論

(1) ミノア文明の Pax Minoica をめぐっては Evans による提唱以来1世紀を超えたが、議論は絶えない。本稿では、Pax Minoica 実在の有無とは関わりなく、もし実在したならばそのための契機そのものが実在し得たかどうかを、ミノア文明の人々の時間と空間に関する概念から考察した。

(2) 現生人類における人類愛の成長を論議した。アテネでは、ペロポネソス戦争とツキジデス症候群という強大なストレスに遭遇した時、人類愛はカオスに陥った。

(3) 複合クワッソン性理論によれば、存在には必ず先行するものがあることから、アテネに先立つミノア文明における人類愛発現の可能性を考察した。

(4) ミノア人は Leibniz の空間と時間の概念を契機として、Pax Minoica の実現に役立てることはできたであろう。また彼らの交易がエーゲ海地域において文化交流の成果をあげたことは高く評価される。エーゲ海には並存を重視する Leibniz の概念が広く浸透していたといえる。

(5) ミノア文明は、Leibniz の並存と継起の概念が青銅器時代に明らかに、濃厚に継承されていたことを示した文明である。

## あとがき

この研究は、計測自動制御学会ロボット・セラピー部会の共同研究「ロボット・セラ

ピー実践研究」のフィールドである特別養護老人ホームにおいて、多くの高齢認知症入居者が完璧な表象を抱いていることに気付いたことから始まった。介護レベル4では表象機能の低下がまったく認められないことは、この機能が進化論的に古く、強固であることの証拠である。

本稿では、BC1628年の大地震直前のミノア人の生活を推量することから考察を進めた。彼らが精確な三次元空間と絶対時間の概念を持っていたこと、一方、緩やかで開放的な社会を構成して行くための Leibniz の概念を日常生活に表現していたことに気づいたことは収穫であった。青銅器時代の現生人類の脳機能は、すでに十分に発達していたといえる。クレタ島の美しい風光、温かな自然が彼らの知能システムの発達に好影響を与えたことは想像に難くない。

## 謝辞

社会福祉法人美鈴会特別養護老人ホーム「パストーン浅間台」（埼玉県上尾市）の米岡利彦事務局長、計測自動制御学会ロボット・セラピー部会浜田利満教授（筑波学院大学）、香川美仁教授（拓殖大学）、木村龍平教授（帝京科学大学）および永沼充教授（帝京科学大学）、日本エーゲ海学会東千尋教授（国学院大学）および千葉茂美教授（明治学院大学）には日頃から親しくご指導を頂いていることに厚く御礼申し上げます。本稿の哲学思想については、本学木村清司教授との日々の討論により裨益されること多大です。またアテネ大学 Lilian Karaly Giannakopoulou 環

境考古学教授からすでに10年以上、親しく教えを受けつつあることは、筆者晩年のよろこびです。とくに2014年夏には、総合研究大学院大学客員教授として来日されていた同教授から3回にわたりミノア文明に関して詳細なご教示を頂きました。ただし、本稿に誤りがあればすべて筆者の責です。この研究は、本学サークル「医療文化研究会」からのロボット・セラピーに関する多数の論文の一つです。ロボット・セラピー実践研究にインターヴィューナーとして参加された本学の多数の女子学生にも感謝します。終わりに臨み、小論発表の機会を与えられた本学赤塚尹巳学長、三浦亮一理事長および関係各位に深謝申し上げます。

#### 参考文献

- 1) イマヌエル・カント著、篠田英夫訳：『純粹理性批判』、岩波文庫（上中下）、1961年（原書“Kritik der reinen Vernunft”の初版は、1787年）。
- 2) 細谷昌志著：『カント 表象と構想力』、創文社、1998年、東京。
- 3) スティーヴン・ミズン著、松浦俊輔・牧野美佐緒訳：『心の先史時代』、青土社、東京、1998年。（原書は、Steven Mithen： “Prehistory of the Mind, A search for the origin of art, religion and science”, Thames and Hudson, 1996）
- 4) 矢後長純：「表象のダイナミクスに関する一試論—表象創出過程の連続性と詩的表現の非連続性」、愛国学園大学人間文化研究紀要、第16号、pp.22-36, 2014
- 5) Niles Eldredge & Stephen Jay Gould： “Punctuated equilibria： an alternative gradualism”, (1972), pp.82-115 in “Models in paleobiology”, edited by Schopf, TGM Freeman, Cooper & Co., San Francisco, <http://www.blackwellpublishing.com/ridley/classictexts/eldredge.asp>
- 6) 安藤金男：「ライプニッツからカントへ時間的継起の秩序と空間的並存の秩序—」、オイコノミカ、第25巻（第2号）、pp.109-139, 1988, 名古屋市立大学経済学会。
- 7) 下村寅太郎：「モノドロジーと場所の哲学—空間論を契機として—」、『下村寅太郎著作集7 ライプニッツ研究』、pp.307~324、みすず書房、1989、東京。
- 8) Gustav T. Fechner： “Die Tagesansicht gegenüber der Nachtansicht”, Dritte Aufgabe, Druck und Verlag von Beitkopf & Hartel, 1919, Leipzig
- 9) エミール・デュルケム著、宮島 喬訳：『社会学的方法の基準』、pp.33-34、岩波文庫、1978年。（原書は、Emil Durkheim： “Les Règles de la Méthode Sociologique”, 1895, Presses Universitaires de France, Edition 1960）
- 10) Antonis Alibertis： “Healing, Aromatic and Edible Plants of Crete”, Mystis, Heraklion, Crete
- 11) Anna Michailidou： “Knossos—A complete guide to the Palace of Minos”, Ekdotike Athenon S.A.2006, Athens
- 12) Catherine Perles： “The early Neolithic in Greece”, Cambridge Univ. Press, 2001）
- 13) Sosso Logiadou-Platonos： Historical Introduction and Knossos. in Sosso Logiadou-Platonos and Nanno Marinatos, editors. “Crete”, pp.6-86, Copyright D. & I. Mathioulakis, Athens
- 14) ポール・カートリッジ著、新井雅代訳：『古代ギリシャ11の都市が語る歴史』、白水社、2011年。（原書は、Paul Cartledge： “Ancient Greece A history in Eleven Cities”, 2009）
- 15) M. バナール著、金井和子訳：『黒いアテナ』上、2004、藤原書店、東京。（原書は、Martin Bernal： “Black Athena. The afroasiatic roots of classical civilization. II The archeological and documentary evidence”, 1991）
- 16) [http://en.wikipedia.org/wiki/Minoan\\_civilization](http://en.wikipedia.org/wiki/Minoan_civilization)： Warfare and the “Minoan Peace”（2014年7月26日現在）
- 17) Cathy Gere： “Knossos and the prophets

- of modernism”, pp.224-225,, Univ. Chicago Press, 2009
- 18) Nanno Marinatos : “Minoan sacrificial ritual —Cult practice and symbolism”, Swedish Institute, Athens, Greece
- 19) J. and E. Sakellariis : Crete Archanes, pp.56-65, Ekdotike Athenon, S.A. thens, 2002
- 20) パートランド・ラッセル著、市井三郎訳：西洋哲学史1、古代哲学、みすず書房、1970年。(原書は、Bertrand Russel : “History of Western Philosophy”, George Allen and Unwin Ltd., London, 1946, London)
- 21) 矢後長純・福田信男：「人類愛の起原とその成長および成熟」、エーゲ海学会誌、第14号、pp.13-35, 2000.
- 22) S. Hishinuma : “A Special Lecture. Historial Review on the Longevity of the Human Beings”, The 20th International Congress of Actuaries, Tokyo, October 25 — Nvember 1, 1976
- 23) 安田嘉憲著：『気候が文明を変える』、岩波科学ライブラリー7、1993
- 24) Anna Lucia D’Agata : “The many lives of a ruin”, Aegean Archeology, 45-59, 2002
- 25) ホメロス著、松平千秋訳：『イリアス』(上、下)、岩波文庫、1992。軍船表は、上巻の第2歌、pp.41-83にある。Hephaistosの工房の様子は、下巻第18歌、p.217にある。
- 26) ホメロス著、松平千秋訳：『オデッセイア』(上、下)、岩波文庫、1994。
- 27) トマス・ケイヒル著、森夏樹訳：『ギリシャ人が来た道』、青土社、2005年、東京。(原書は、Thomas Cahill : “Sailing the wine-dark sea . . . Why the Greeks matter”, Nan A. Talese Doubleday, 2003)
- 28) リック・ゴア著、井上暁子、伊藤和子共訳：「地中海の覇者フェニキア人」、『ナショナルジオグラフィック ビジュアル保存版 古代ギリシャ・フェニキア』、pp.116-142, 2008, 日経ナショナルジオグラフィック社、東京。
- 29) J. R. Hughey, P. Paschou, P Driness, D. Mastropaulo, D. M. Lotakis, P. A. Navas, M. Michalodimitrakis, J. A. Stamatoyannopoulos & G. Stamatoyannopoulos : “A European Population in Minoan Bronze Age Crete”, Nature Communications, 4, Article Number 1864, doi:10 1038/ncomms2871, Published 14 May 2013
- 30) Susan Guettel Cole : “Greek religion”, pp.266-317, in John R. Hinnels “A handbook of Ancient Religions”, Cambridge University Press, 2007
- 31) 矢後長純：「クレタ島ヴァシペトロ遺跡を訪ねて—ゼウスはミノア文明の終焉をどう見たか?」、愛国学園大学人間文化研究紀要、第9号、pp.71-84、2007年)
- 32) 矢後長純、齋藤彩香、大井一徹：「クレタ島ヴァシペトロ遺跡—マリナトス教授によるヴァシペトロ・メガロンの発掘、同メガロンにおける農業歴の作成およびミノア文明からミケーネ文明への交代に関する文献的考察」、エーゲ海学会誌、第23号、1-16、2009年。
- 33) Marinatos, S. : “The volcanic destruction of Minoan Crete”, Antiquity, 13, pp.425-439, 1939.
- 34) 矢後長純・福田信男・立浪忍：「生体システムと寿命」、松本信二・船越浩海・玉野井逸郎編『細胞の増殖と生体システム』、pp.235-255、学会出版センター、1993年、東京。
- 35) C.W.マリーン：「祖先はアフリカ南端で生き延びた」、日経サイエンス、pp.41-48、2010年11月号。(原文は、Curtis W. Marean : “When the sea saved humanity”, Scientific
- 36) 齋藤彩香・東澤麻衣子・鈴木貴子・矢後長純：「ロボットは現生人類の「とっさの行動」を真似できるか」、 “計測自動制御学会ロボット・セラピー部会アニュアル・レポート2010年” 所収。American, August, 2010)
- 37) トウキディデス著、久保正彰訳：『戦史』、巻2、pp.365-369、世界の名著5、中央公論社、1970.
- 38) John Hazel : “Who’s who in the Greek world”, pp.175-176, 2000, Routledge, London.
- 39) 矢後長純・福田信男：「クワッソン性システムによる寿命理論の展開—生体高分子の寿命から人類生命表および意識の構造に至る2コンパートメント準平衡理論—」、ライフ・スパ

- ン、第14号、pp.1-74、1999、(財) 寿命学研究会、東京。
- 40) P. C. W. デイヴィス著、戸田盛和・田中裕共訳：『宇宙における時間と空間』、岩波現代選書、(原書は、Paul C. W. Davies：“Space and time in the modern universe”, Cambridge University Press, Cambridge, 1977)
- 41) イマヌエル・カント著、川戸好武訳：『可感界と可想界との形式と原理』、カント全集第3巻、前批判期論集(2)、pp.211-268、理想社、1965。(原書は、Immanuel Kant：“De mundi sensibilis atque intelligibilis forma et principiis”、英訳は、Jonathan Bennet “The form and principles of the sensible and intelligible world”, May 2012)
- 42) スチュアート・カウフマン著、米沢富美子訳：『自己組織化と進化の論理』、日本経済新聞社、1999年。(原書は、Stuart Kauffman：“At home in the univers : The search for laws on self-organization and complexity”